様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：13201
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008～2010
課題番号：20320037
研究課題名（和文）　森鷗外『椋鳥通信』における西欧文化の受容・伝播の総合的研究
研究課題名（英文）　The influence to Japanese literature of the Western culture of the Ougai Mori ″椋鳥通信 Mukudoritsushin″

研究代表者
金子幸代（KANEKO SACHIYO）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：40224597

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、森鷗外の『椋鳥通信』を対象として大きく変貌を遂げた日露戦後の日本文化に与えた影響について次の二点から実証的に調査研究していくことである。
第一の目的はこれまで研究の遅れていた『椋鳥通信』の全容を明らかにする基礎作業として、事項索引、人名索引、作品索引、出来事索引のデータベースを作成すること。第二の目的は、演劇・文学・美術の総合的視点から調査研究することで日露戦争後の日本文学における西欧文化の受容並びに伝播の実態を実証的に明らかにすることである。そのため演劇・文学・美術を専門にする研究者が結集し、日露戦後の西欧文化の受容と伝播について、森鷗外の『椋鳥通信』が与えた影響を演劇・文学・美術の総合的な視座から再検討を試みるものである。

研究成果の概要（英文）：
A purpose of this study is the next thing making research from two points about the influence that "“椋鳥通信 Mukudoritsushin” of Mori Ogai gave in Japanese culture after the Russo-Japanese War.
The first purpose make a database of “椋鳥通信” such as a name index, a work index, the event index.
The second purpose is to clarify a reaction of the Europe culture by “椋鳥通信” in the Japanese literature after the Russo-Japanese War.
Therefore the researchers who specialized in drama / literature / art gathered and clarified it from the viewpoint of drama / literature / art about influence that "椋鳥通信" of Mori Ogai gave.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
総　計	5,600,000	1,680,000	7,280,000

研究分野：日本文学
科研費の分科・細目：
キーワード：ジェンダー、ドイツ文学、文化交流、森鷗外、椋鳥通信、演劇、翻訳文学、西洋美術

１．研究開始当初の背景

『椋鳥通信』とは、一九〇九年(明治四十二)三月から一九一三年(大正二)一二月まで「スバル」に、五五回の長期にわたり連載された鷗外によるヨーロッパ通信であり、ドイツの新聞記事の中から鷗外が翻訳紹介したものである。『椋鳥通信』に見られる目配りの広さ(情報量の豊富さ)と速報性による日露戦後期の日本文学への影響の大きさが指摘されながら、その情報量の多さ故、これまで実態について具体的に検討されておらず、『椋鳥通信』の原拠となったドイツの新聞についても明らかにされていない。また、演劇・文学・美術の総合的観点から『椋鳥通信』について実証的に検証した研究も国内外をみても今のところ他にはない。

そこで研究代表者金子幸代は、二〇〇六年四月編著『鷗外女性論集』(不二出版)を著し、日露戦後の情報発信の場として果たしていた『椋鳥通信』の重要性に着目し、当時の文学作品に与えた影響を考察した。「読売新聞」など当時の新聞で『椋鳥通信』が連載当初から注目され反響を呼んでいたことが裏づけられ、『椋鳥通信』は日露戦後の日本における西欧文化受容・伝播において牽引車の役割を果たしていることが考えられる。

現在さらに『椋鳥通信』の全六八九一項目の分析に着手し、二〇〇七年八月には「鷗外『椋鳥通信』から『さへづり』へ―情報メディアと創作―」(『日本比較文学会東京支部研究報告』)で、特に『椋鳥通信』の女性に関する記事が、同時期の女性投稿雑誌「女子文壇」の中で「西洋婦人新聞」や「西洋の婦人」という名で転載され伝播されていたことを明らかにしてきた。

『椋鳥通信』が連載された時期の日本は、日露戦争によって大きな変革期を迎え、産業だけでなく文化・芸術面などでの変化がめざましい時期にあたる。新国家発展の支柱となるような民族的な自覚の高揚と、それとは対照的な個人の自覚の成長が現われ、演劇の方面では「新劇」と呼ばれる西洋の近代劇を手本とする芸術性の高い演劇の創造をめざす動きが現れた。美術の方面では第一回文部省美術展覧会(文展)が開催され、個人が美術団体・派閥に関らず応募することが可能となったが、その推進に『椋鳥通信』の情報がかかわっていたこともわかってきた。

それゆえ、全六八九一項目にわたる時代・思潮を映し出す膨大な情報の宝箱である『椋鳥通信』について日本文学・ドイツ文学・西洋美術の専門家が結集することによって、『椋鳥通信』の日露戦後の日本文学に与えた影響が総合的に解明できると考え、本研究の必要性を認識した。

２．研究の目的

本研究の目的は、森鷗外の『椋鳥通信』を対象として大きく変貌を遂げた日露戦後の日本文化に与えた影響について次の二点から実証的に調査研究していくことである。

第一の目的はこれまで研究の遅れていた「椋鳥通信」の全容を明らかにする基礎作業として、事項索引、人名索引、作品索引、出来事索引のデータベースを作成すること。第二の目的は、演劇・文学・美術の総合的視点から調査研究することで日露戦争後の日本文学における西欧文化の受容並びに伝播の実態を実証的に明らかにすることである。そのため演劇・文学・美術を専門にする研究者が結集し、日露戦後の西欧文化の受容と伝播について、森鷗外の『椋鳥通信』が与えた影響を演劇・文学・美術の総合的な視座から再検討を試みた。

まずは、学術的背景と研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯について述べたい。

『椋鳥通信』とは、一九〇九年(明治四十二)三月から一九一三年(大正二)一二月まで「スバル」に、五五回の長期にわたり連載された鷗外によるヨーロッパ通信であり、ドイツの新聞記事の中から鷗外が翻訳紹介したものである。『椋鳥通信』に見られる目配りの広さ(情報量の豊富さ)と速報性による日露戦後期の日本文学への影響の大きさが指摘されながら、その情報量の多さ故、これまで実態について具体的に検討されておらず、『椋鳥通信』の原拠となったドイツの新聞についても明らかにされていない。また、演劇・文学・美術の総合的観点から『椋鳥通信』について実証的に検証した研究も国内外をみても今のところ他にはない。

そこで研究代表者である金子は、二〇〇六年四月編著『鷗外女性論集』(不二出版)を著し、日露戦後の情報発信の場として果たしていた『椋鳥通信』の重要性に着目し、当時の文学作品に与えた影響を考察した。「読売新聞」など当時の新聞で『椋鳥通信』が連載当初から注目され反響を呼んでいたことが裏づけられ、『椋鳥通信』は日露戦後の日本における西欧文化受容・伝播において牽引車の役割を果たしていることが考えられる。

現在さらに『椋鳥通信』の全六八九一項目の分析に着手し、二〇〇七年八月には「鷗外『椋鳥通信』から『さへづり』へ―情報メディアと創作―」(『日本比較文学会東京支部研究報告』)で、特に『椋鳥通信』の女性に関する記事が、同時期の女性投稿雑誌「女子文壇」の中で「西洋婦人新聞」や「西洋の婦人」という名で転載され伝播されていたことを明らかにしてきた。

『椋鳥通信』が連載された時期の日本は、日露戦争によって大きな変革期を迎え、産業だけでなく文化・芸術面などでの変化がめざましい時期にあたる。新国家発展の支柱となるような民族的な自覚の高揚と、それとは対照的な個人の自覚の成長が現われ、演劇の方面では「新劇」と呼ばれる西洋の近代劇を手本とする芸術性の高い演劇の創造をめざす動きが現れた。

美術の方面では第一回文部省美術展覧会(文展)が開催され、個人が美術団体・派閥に関らず応募することが可能となったが、その推進に『椋鳥通信』の情報がかかわっていたこともわかってきた。

それゆえ、全六八九一項目にわたる時代･思潮を映し出す膨大な情報の宝箱である『椋鳥通信』について日本文学・ドイツ文学・西洋美術の専門家が結集することによって、『椋鳥通信』の日露戦後の日本文学に与えた影響が総合的に解明できると考え、本研究の必要性を認識した。

『椋鳥通信』は日露戦後の時代を映し出す情報のデパートとなっているが、現在『椋鳥通信』の一九〇九年三月から一九一〇年二月までの項目の調査に着手し、『椋鳥通信』の項目において順に演劇・文学・美術が高い割合であることが明らかになった。

本研究では、『椋鳥通信』において最も特徴的である演劇・文学・美術の分野にしぼって研究の推進を図った。それゆえ、演劇・文学・美術という個々の視点だけでなく、それら複数の領域をまたぐ総合的な視座から調査研究を行った。

次に、当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義は以下の通りである。

・日露戦後期における西欧文化の日本文学への影響を複数の領域から横断包括して考察する総合的かつ学際的研究が現在ますます必要になってきているが、これまで日露戦後の日本文学の変化についてドイツをはじめとする翻訳文学や演劇・美術との関係から究明する研究はなく、日本近代文学研究のみならず日欧文化交流史の実態を掘り起こすものとして本研究の特色、独創性を際立たせている。

・一九〇九年(明治四十二)三月から一九一〇年(明治四十三)三月までのデータベースも完成しており、現在個々の項目について分類し、実証的な調査研究を進めている。社会問題と並び女性問題についての項目も多く、実際に項目を検討していった中で、イギリスで起こった女性参政権運動に関する記事が多いことも判明している。「鷗外『椋鳥通信』から『さへづり』へ」(前掲)の中で明らかにした当時の女性雑誌に与えた影響を、本研究においてより実証的なデータと総合的視点から検討を加えることによって女性文学・文化への影響について解明を試みた。

・『椋鳥通信』関連のデータベースの作成を行うことで日露戦後の西欧文化の受容の実態が明確になり、日本文学のみならずドイツ文学・演劇学・美術史・女性文化研究といった多角的な領域をまたぐ学問分野の発展に寄与し、INDEX として広く活用されるであろう。

・『椋鳥通信』を素材とする初めての体系的な研究により、日露戦後の日本文学の変化について演劇・美術など幅広いジャンルからの影響が実証的に明らかになり、文学史に新たな問題提起を行うことができた。

３．研究の方法

全体の研究計画・方法は以下の通りである。

・日露戦後の西欧文化の受容・伝播を考察するために森鷗外の『椋鳥通信』を本研究では取り上げ、日露戦後の日本文学への影響について演劇・文学・美術の総合的視点から実証的に明らかにするには継続した研究が必要であり、そのため研究期間を三年とし、次のような研究方法と計画で進めてきた。

・日露戦後から明治終焉期にあたる一九〇九年から一九一三年までの五年間について、『椋鳥通信』の項目索引(事項索引・人名索引・作品索引・出来事索引)のデータベースを完成させる。なお、すでに『椋鳥通信』の事項索引作りに着手した。

・日露戦後の西欧文化の受容と伝播を総合的に究明するために、『椋鳥通信』による西欧近代劇の影響の実態調査、日本文学への影響の実態調査、ドイツ文学の受容の実態調査、西洋美術の影響の実態調査の四点について実証的に検証した。

研究組織の必要性･目的との関連性は次の通りである。

・『椋鳥通信』について演劇・文学・美術の総合的視点から実証的に解明するために、演劇・日本文学・ドイツ文学・美術を専門とする研究組織の結成が必要なので、四名の研究者と海外共同研究者一名を加え組織した。

・研究代表者の金子は、ヨーロッパとの比較思想的な研究を従来から続けており、ドイツ語圏を中心とするヨーロッパの大学・学会などの研究組織とも連携し、シンポジウムへの参加、論文発表も含めて行ってきた。特に、西欧近代劇の日本文学への影響の検証と実態調査について研究を行っており、日本近代劇の発展に果たした鷗外の功績に

関心がもたれる契機を作っている。
・組織としては日本文学･美術･ドイツ文学･演劇という専門分野の異なる研究者が連携して研究を進めることで、国の枠を超え、ジャンルをも超えた総合的な視点から日本文学への影響について多面的かつ実証的な調査研究を着実に行うことにした。

なお、データベース化の基礎作業と研究の二点において、富山大学に在籍する大学院生の協力も得て実現した。翻訳文学の影響を明らかにする作業を通して欧州、ロシアとの距離が急速に縮まっていく時代を、本研究作業を通じて知る機会となる。さらにコンピューターを使ったデータベースの作業に具体的に携わることによって、これまでとは異なる研究法の可能性を広げることになった。

４．研究成果

二〇〇八年度

○『椋鳥通信』が掲載されている『スバル』復刻版を購入し、索引目録、データベースの完成
・研究代表者金子は『椋鳥通信』の索引目録（事項索引・人名索引・作品索引）を作成、精査し、日露戦後の日本文学への影響の全体像が把握できるようにデータベースを完成させた。
○文献資料の収集･整理・『椋鳥通信』本文内容の分析
・日独双方を対象とした『椋鳥通信』の関連文献の資料収集を行った。
・金子は『椋鳥通信』の原拠と考えられるベルリナー・ターゲブラットについてベルリンのフンボルト大学の鷗外記念館や図書館にて文献資料の収集を行い、目録の作成を行う。加えて、コペンハーゲン大学教授長島と連携し、研究の調整を行った。
・出原は文献資料を作者ごと、ジャンル別に整理し、ジャンル別の項目作成を行った。
・平山は翻訳小説、翻訳戯曲に分けて顕著な特徴が見られるかどうか分析し、項目作成を行った。
・圀府寺は、『椋鳥通信』での西洋美術紹介が日本文学にどのような影響を与えたかを人名別に調査検討するための項目作成を行う。
・長島は『椋鳥通信』にある北欧演劇の調査活動を行い、必要に応じて資料提供や専門的な見解をインタビューし、データの蓄積を行った。
○成果発表―研究打ち合わせ会を年三回（東京・大阪・富山）開催し、研究分担者全員の項目検討や共同討議をふまえ調査研究を進める。それと共に年度末には索引集を作成した。

二〇〇九年度

○索引目録・本文照合
前年度完成させた索引目録と本文内容とを照合検討し、精密度の高いものにした。
○文献資料の収集･整理・目録
・『椋鳥通信』関連文献・日露戦後翻訳文学関連文献の収集と整理を行う。
・ベルリンのフンボルト大学図書館で調査収集し、目録を作成した。
○文献資料のデータベース化と分析
・演劇・文学・美術における『椋鳥通信』関連文献の資料目録を作成、データベース化を行った。
・『椋鳥通信』の関連文献資料を調査研究し、日露戦後の近代劇の興隆や日本文学における西欧文学の受容、西洋美術の影響について実態調査を行った。
・分析にあたっては、特に日露戦後の女性解放運動や女性文芸誌への影響について、当時の女性解放運動や女性雑誌との関係を解明するためにジェンダーの視点から検討した。
○成果発表を行い、関連する学会で研究発表を積極的に行い、批判的検討を加え、分野別項目集を作成した。

二〇一〇年度

○研究のまとめ―データベースの活用に向けた国際シンポジウムの開催と報告集作成を行った。
・最終年度にあたり、これまでの調査成果を踏まえ、演劇・文学・美術の総合的視点から実証的に解明するための研究作業のまとめを行い、関連する学会で研究成果の発表を行った。
・研究成果である『椋鳥通信』索引集・項目集を刊行し、関連する研究者や研究機関に配布した。
・海外共同研究者のコペンハーゲン大学教授長島要一を招聘し、共同研究者全員によるデータベースを活用した国際シンポジウムを開催し、研究成果を広く国内外に発信・公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 14 件）

1.金子幸代「『椋鳥通信』における鴎外の引用戦略―市民的公共圏を求めて―」「二〇一〇年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬の総合的研究」査読無、3号、2011、9-16 頁
2.出原隆俊「鴎外「椋鳥通信」で言及した作者の翻訳作品の他者利用について」「二〇一〇年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書「森鷗外『椋鳥通信』における西洋

文化の受容と伝搬の総合的研究」査読無、3 号、2011、34-41 頁
3.国府寺　司「「椋鳥通信」における美術情報」「二〇一〇年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬の総合的研究」査読無、3 号、2011、46-49 頁
4.金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』への視角 3」「富大比較文学」査読有、3 号、2011、134-170 頁
5.金子幸代「森鷗外の『椋鳥通信』―『さへづり』・『沈黙の塔』へ―」「富山大学人文学部紀要第」査読有、54 号、2011、349-368
6.金子幸代「文学における国際交流シンポジウム報告書　改訂・森鷗外『椋鳥通信』の人名紹介・人名索引」
7.平山令二「ドイツ文学と環境」「人文研紀要」査読有、67 号、2010、421-445 頁
8.金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬の総合的研究」「二〇〇八年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書」査読無、2009
9.平山令二「グリム童話とチェルノブイリ―ドイツ文学と環境問題-」「世界文学」査読有、107 号、2009,13-27 頁
10.金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』への視点―鷗外の意思表明」「富大比較文学」査読有、第 1 集、2008、87-109 頁
11.平山令二「文学と法その(5)―ホフマンの場合―」「ドイツ文化」査読有、2009、64 号 13-27 頁
12.出原隆俊「『金閣寺』の構成意識」「三島由紀夫研究」査読有、7 号、2009、54-77 頁
13.金子幸代「鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬」「PS JOURNAL」査読有、12 号、2008、1 頁
14.金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』への視角 2「富大比較文学」査読有、2 号、2009、96-101 頁

〔学会発表〕（計 6 件）

二〇〇八年度
1・金子幸代　日本比較文学会 60 周年記念東京支部大会
清泉女子大学
「発禁問題と森鷗外」
2・平出修研究会
明治大学
金子幸代「森鷗外と『椋鳥通信』」
3・国文学言語と文芸の会
筑波大学東京キャンパス
金子幸代「森鷗外『沈黙の塔』と発禁問題―『椋鳥通信』からの視角―」

二〇〇九年度
4・日本比較文学会全国大会口頭発表
大阪大学
金子幸代　「森鷗外『椋鳥通信』―西欧文化受容・伝播への一視角―」

二〇一〇年度
5・「国際シンポジウム　文学における国際交流―異文化理解の検証と普及―」
富山大学
金子幸代「森鷗外における東西の知の融合」
6・日本近代文学会北陸支部大会シンポジウム　富山大学
金子幸代「森鷗外の「椋鳥通信」―『さへづり』・『沈黙の塔』へ」

〔図書〕（計 5 件）
1 金子幸代(共著)『図説　翻訳文学総合事典第五巻　研究篇』　二〇〇九年一一月　大空社
「森鷗外の翻訳と『沈黙の塔』―『危険なる洋書』・発禁問題・メディアとの闘争―」
2 金子幸代『鷗外と近代劇』二〇一一年三月　大東出版社
3 金子幸代「二〇一〇年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬の総合的研究」二〇一一年三月
4 金子幸代「森鷗外『椋鳥通信』における西洋文化の受容と伝搬の総合的研究 2」「二〇〇九年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書」二〇一〇年三月
5 金子幸代「二〇〇八年度科学研究費基盤研究(B)研究成果報告書」二〇〇九年三月

〔その他〕
ホームページ
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/hibun/kaneko/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者
金子幸代（KANEKO SACHIYO）富山大学・人文学部・教授
研究者番号：40224597
(2)研究分担者
出原隆俊（IZUHARA TAKATOSHI）大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：10145930
(3)研究分担者
囮府寺司（KOUDERA TSUKASA）大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50205340
(4) 研究者分担者
平山令二（HIRAYAMA REIJI）中央大学・法学部・教授
研究者番号：40125779